

中国のほんの話 (49)

絶対的秘蔵 ～中国で最初にプライバシーを取材した女性記者～

蔭山 達弥

安頓（本名張傑英、女）は『北京青年報』の編集者、記者である。彼女は1995年8月より、中国人の愛情関係に関する特殊な事例の調査に従事し、1997年6月6日より、『北京青年報・青年週末』の紙面「人は旅の途中」口述記録欄を担当している。

『絶対的な秘蔵』（Absolute Privacy, 原題《絶対隱私》、中国・新世界出版社、1998）は安頓が1997年から1998年にかけて取材、記録した400人余りから選んだ20代から30代、20人の男女のインタビュー集である。筆者が所有しているのは2001年2月の第25版で、すでに331,000冊刷られており、中国では辞書類を除いて破格のベストセラーと言えよう。

安頓の取材を受けた人は年齢や職業は様々、ポケットベルや電話を通じて連絡してきたが、彼らの質問は等しく「どうすれば取材を受けられるのか」というものだった。安頓は取材の前に、面倒がらずに取材を受ける人に言った。「私に完全な事実を、自身で切り貼りしていない事実を言って欲しい。あなたが最もふさわしい、最も適したと思う言葉で述べてもらって結構です。人名や地名、職場や当事者だけが分かる細かな話を避けないで欲しい。録音が終わる時、どこを文章にしてよいか、どこを隠して欲しいか言ってよく、自分の好きな名前を選んで、私の文章の中に使ってもらっていい。私を訪ねてきてくれたということは、私を信用してくれたということだから、あなたとあなたが述べた人々を保護しよう。私以外にこの録音を聞く者はいない。」安頓がこのように言った目的ははっきりしている。もし、取材を受けた人が私たちの談話と談話後の文章の発表によって、その後の生活に面倒が起るようなら、一から入ってはいけなからだ。

安頓が取材をして非常に驚いたのは、仲睦まじく共に老年に至った夫婦や忠節を守って心変わりしない恋人は一組も無かったことだ。あらゆる物語が悲しい、粉々に砕けた話で、あらゆる筋が生きるか死ぬかの芝居よりもいっそう生きるか死ぬかに満ちており、人を嘆き悲しませるものであった。



安頓の「口述記録」が成功した理由は、彼女がいかなる問題も解決しようとせず、ただ真面目に耳を傾けたからだ。真面目に耳を傾けようとする人がいれば、訴えようとする人は平等を感じ、安心感に満ちて胸の内の激しい感情を保てるのだ。安頓の「口述記録」は大作映画のように素晴らしくなく、主人公の実名を伏せ、真実を証明できる録音を聞かせようとしなない。しかし、安頓の「口述記録」は真実の個人だと信じていることができる。

安頓の『絶対的な秘蔵』が出版されて5年後、『夜が明けたら別れを言う 19人の都会女性の一夜の逢瀬の口述実録』（原題《天亮以后说分手》中国電影出版社、2003）が出た。ほぼ同じ時期に『夜が明けないうちに別れよう 19人の女性スター、女性司会者、女性モデル、美女作家の感情と体の旅』（上海社会科学院出版社、2003）、さらに『夜が明けたら別れない 一夜の逢瀬から夜毎の逢瀬 14人の都会女性の口述実録』（中国工人出版社、2003）も出た。体裁は『絶対的な秘蔵』を真似ているが、いずれも読者の（特に男性の）好奇心を煽るだけの浅薄な内容である。

ノンフィクションではなく、小説であるが、テレビドラマにもなり大ヒットした王海鸰の『中国式離婚』（中国・北京出版社、2004）の方が、当代中国のありふれた家庭の離婚物語を深く掘り下げている。中国人の結婚の現状を、パノラマ式に映し出し、違った角度、違った態度で中国人の結婚を説明した新作である。三組の夫婦の情感と彼らがそれぞれ結婚生活で直面する問題を深く分析し、結婚の契約の下での夫婦間の肉体と精神の反逆を明らかにしている。

かげやま たつや（教授・中国文学）